一次創作練習用短編連作

triptych

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一次創作練習用短編連作

【Ｎコード】

Ｎ９１８７Ｔ

【作者名】

ｔｒｉｐｔｙｃｈ

【あらすじ】

小説の練習、没ネタの再利用、及び番外編的な短編を気ままに載せていきます。要望が多ければ更に番外編が追加されるやも知れません。

注：作者のホームページに過去掲載されていた物も含まれております。

一次創作練習作　０（前書き）

原作家大賞に応募した作品の没オープニング。次回作と世界観が同じなので、設定を煮詰めるために上げてみました。

一次創作練習作　０

それは一九九九年七月、恐怖の大王がやってくるという予言に世間が沸(わ)いていたある日の夜。

日付が変わろうとしている中、一人の少女が夜道を歩いていた。ほどなくして少女は大きな病院の前で止まり、病院の屋上にあるヘリポートを見つめる。残念だがこの街灯が並ぶ下にいては星は一つも見えなかった。

少女の特徴的な点は瞳と背中の真ん中に届くほど伸ばされた髪の色。どちらも深いワインレッドだ。年は低い背に童顔のためどう高く見積もっても十六、七にしか見えない。だがこれでも少女は対外的には三十五歳で通っていた。尤も、本来の年齢からは桁が二つ程違っていたりするのだが。

「引越しの荷物も纏(まと)めたし、明日になれば懐(なつ)かしの我が里に凱旋(がいせん)、と」

少女が郷里(きょうり)を出てから二十年の歳月が過ぎた。その間に少女は高校、大学を卒業し、十一年の間大病院の外科医として経験を積んだ。無論、未だ未熟な点は多い。しかし十五年と決めて屋敷を出たのだ。ここまで帰るのを伸ばしてくれただけでもありがたい。

退職する際には多くの仲間が別れを惜しみ、騒々しい追い出し会をやってくれた。開業する際には誘ってくれと言ってくれた者までいる。

「帰ったらバリバリ、は働けないか。人少ないし」

再就職先は決まっている。郷里に建てられた中規模の病院、そこで働く医者の一人として、各地から戻ってくる同志達と共に命を救

うのだ。『真っ当な人間』が住んでいる家は少ないため、近隣から患者が来ることは稀だろうが。

だが、地元から患者が来なかったところで問題はない。これから始める新しい医療によって、全国から患者が集まってくるだろう。

問題はただ一つ。最初のアピール、それが何よりも肝心だ。

それについては里を纏め上げる長に全て任せているが、どうしても少女は不安を拭う事ができなかった。病院に向かって一礼した後、身を翻した少女は早歩きで来た道を戻り始める。

数分もしない内に少女は借りていたアパートに辿り着いた。中の電気は消えたままだ。音を立てないように中に入ると、タオルケットをかけられた三人の子供が静かな寝息を立てている。それを見て少女は安堵の息を吐いた。

当面の最優先事項はこの三人の母親代わりとなることだ。そのための便宜も図ってもらえるようになっている。眠る子供達の額にキスをしてから少女は寝巻に着替え、布団の上に寝転んだ。

「お休みなさい」

静かにそう告げるてから目を閉じる。それから寝息が一つ増えるのに、さして時間はかからなかった。

†

とある山奥の部落と言って差し支えない村、その中の一際大きな山に登る獣道の上に常識を逸脱した広い敷地の屋敷があった。山に入るには屋敷の正門をくぐり、獣道に繋がる裏門をくぐらなければ

ならない。それ以外の方法では山に立ち入られぬよう強力な結界による封がされ、屋敷の主の許可が無くては山に入ることも山から出ることもできない仕組みになっていた。

その屋敷の門前。刀を、槍を、弓を、銃を構える黒尽くめの一団が門を守るように佇む巫女服を着た女性を取り囲んでいる。

金糸のごとき髪を風になびかせる女性の頭には獣の耳が、さらに赤い袴の後ろからは四本の尾が生えている。それらがただの飾りでない事は、取り囲む黒尽くめ達が最も痛感していた。

「妖めが……」

刀を持った黒尽くめが歯軋りをして憎々しげに呟く。

「私は仙狐ですから妖ではないのですが……」

「同じ事だ！　この人の世に貴様ら人ならざるモノは必要ない！」

涼しげな笑顔を向ける女性に激昂した黒尽くめの一人が発砲する。弾頭に特殊な紋様が刻まれた弾丸は、しかし見えない壁のようなものに弾かれ女性には届かない。

「なればこそ、我々はこうして隠れ潜んでいたのです。それをわざわざ暴き立ててまで討滅しようとするなど……時代に必要されなくなったのはあなた方ではありませんか？」

「う、うるさい！　妖風情が偉そうに！」

「奴の言葉に耳を貸すな！　かかれ！」

黒尽くめの一団が一斉に攻撃を開始する。不可視の防壁の中で、女性は小さくため息をついた。

半刻後。黒尽くめの者達は呻(うめ)き声を上げながら地に倒れ伏していた。随分(ずいぶん)手加減したため重傷を負った者はいない筈だが、リーダー格の人間は仲間を見捨てて逃げ出している。ここに残された者達の処遇を少しばかり考えて――結局女性は放っておく事にした。夏の夜だ。一晩外にいたところで風邪を引く事はあっても冬のように凍(こご)え死ぬような事はないだろう。

「既に人と我ら異族(いぞく)が争う時代は終わり、今や我々は各地に息を殺して身を潜めている。ですが、これからは違う。我々異族の存在を、世界に認めさせて見せましょう」

門を小さく開けて屋敷の敷地に入り、門に閂(かんぬき)をかける。これによって門にかけられた防御術式が起動し、外敵の侵入を防ぐ。消耗した外の者達ではこの門に一筋の傷でさえも付けられはしない。

屋敷の玄関に向かいながら女性は決起の日に思いをはせる。二十年前から進められていた計画もいよいよ大詰めだ。

女性が空を見上げる。新月の夜、星たちの輝きが澄んだ夜気の下はっきりと見えた。

そして一週間後の正午、とある声明がマスコミを通じて一つの声明が発表された。屋敷の門前でマスコミに囲まれた獣耳と尾を持つ女性は、向けられたカメラやマイクに告げた。

「初めまして。私が恐怖の大王です」

その宣言が為された直後、巨大な黒色の竜巻が村を飲み込んだ。竜巻内部との連絡は途絶え、災害救助のため自衛隊が出動し、近辺

の村民は指示されるまま避難する。
だが三時間もの間一切の動きを見せなかった竜巻が唐突に消えた後には、どこにも災害の被害などありはしなかった。竜巻のあった場所に不可視、不可触の結界が張られていた事を除いては。

「我ら異族(いぞく)は、人間との共存を望みます」

カメラに向かって微笑みながら女性が宣言する。そしてそれが、彼女達の戦いの始まりだった。

一次創作練習作　０－？（前書き）

『一次創作練習作　０』を別視点で書いてみました。練習作の世界観の土台ではありますが、やっぱり本編とは何の関係もありません。

一次創作練習作　０１？

開幕

黒い風が渦を巻いている。いや、それは黒ではなく光を喰らう闇によって出来た竜巻だ。普通に考えて巻き込まれれば命は無い。そんな竜巻を内側から眺める女がいた。白い小袖に胸から下を覆う緋袴を穿いている。巫女、と呼ばれる装束だ。

その竜巻が本当に風によって構築されていたものならばその被害は計り知れないだろう。だが、この黒い竜巻は結界の拡大が視覚化しただけの存在に過ぎない。いわば幻影だ。それはこの竜巻の外にいる人間にもすぐに分かるだろう。なにせこれだけ巨大な竜巻でありながら、風が一切無いのだから。

（そもそも竜巻って移動するものじゃなかったかしら？）

段々遠ざかる闇で出来た壁を眺めながら、女はふとそんな事を思った。が、すぐにその顔には柔らかな微笑みが戻る。

不自然であればあるほどいい。必要なのは神域の拡大と世間の注目。この結界の拡大はそれを両立してくれる。

（後は原稿通りに自己紹介するだけ、ね）

こんな山奥の部落といった方がいいくらいに小さな村でもテレビは映るし電話線も通っている。その名を騙れば日本だけではなく世界の注目を集める事も簡単だということは女も知っていた。

ふと背を預けていた門から身を離し、広い道の向こう側に立って竜巻の中心となっている屋敷を見上げる。唯一の入口である大きな

門と長く長く続く塀。かつて百を越える者たちが住んでいた程の広大な屋敷なのだが、今となってはその住人の数は大きく減少している。
そんな屋敷の中央から細長い光が遠く天の彼方まで真っ直ぐに伸びていた。清浄なる光。穢れなき純白。神々しいという表現がこれほど似合う物は無いだろう。
だがそれは同時に現し世に生きる者、霊格の低い生き物にとっては毒と同義。余りにも濃すぎる神聖さは内に取り込んだものを変質させる。器物が命を得る様な奇跡もあれば、獣が人に変わってしまう事さえ有り得る。それはまさに異界。正邪の区別無くあらゆる存在を汚染し得る原色。それこそが神なのだ。
女は立ち上る神気より視線を切り、坂の下の病院を見る。中規模の病院ではあるが、設備に関して言えば大病院となんら遜色はない。この屋敷を城だとするならば、あの病院こそが女とその同胞達の戦場だ。二十年前全国に散っていった彼らは、今あそこで戦の準備をしている。志を同じくしてくれた人間達と共に。
ふと何かの雑誌で見た知識を女は思い出した。
ゴッドハンド。
神業のような技術を持つ外科医の事をそう呼ぶのだという。
だが、それでも零れ落ちる命を救う事などそうそう出来はしない。
なぜならば、本物の神でさえ全ての命を救う事は不可能なのだから。
女の目の前を小さな雪が舞う。
否。それは雪などではなかった。
空から粉雪のように舞い落ちるそれは、天に立ち上り粉々になった光の破片。竜巻に呑み込まれた――結界に閉じられた場を神域へと変える神の息吹。
しかしこの神域は禁域に非ず。この地に訪れたものを呑み込み、内に過ごすものに安寧を与え、去るものを見送り、害為そうとするものを惑わせる、神の御心を体現する場となるのだ。

ただ、薄く神気が漂う程度では鈍感になった人間は気付かない。自分がどのような地に踏み入ろうとしているのか、禁則を犯す事がどれほど度し難い事か、そして確固たる己を持つことすらも忘れてしまう。

女が物憂げに息を吐いたその時だった。

突如、薄紅色の光が世界を染め上げる。

それが結界の完成した印だと女が気づいた時、既に視界のどこにも黒い竜巻の壁は無かった。

そして竜巻が消えた今も屋敷の中から光は天に突き立っている。異変の中心を示すように。

静かだった。

風も、虫も、何もかもが死に絶えたような静寂の中で、女は再び門に背を預ける。

その静寂を破ったのは、遠くから聞こえてきた車のエンジン音。同時にそよ風が吹き、木々のそよめきと虫の鳴き声が戻ってくる。その車の中に黒の色が無い事を確認して、女は安堵した。これだけの異常に最早隠蔽は不可能と諦めたのか、それとも惑わされてこの場所に到達出来ないのか――おそらくは後者だろう。

やがて幾台ものボックスカーが門前に止まり、中から出てきたマイクや大きなカメラを持った人間が女を囲み、そして硬直してしまった。

女は金に艶めく髪をなびかせ、頭頂部の耳をピクリと動かせる。同時に袴の後ろがもぞもぞと蠢いてた。だがマスコミのリポーター達が動きを止めたのは女の見てくれのためなどではない。その雰囲気にこそ原因がある。ただそこにいるだけで伝わってくる圧倒的な存在感。人など及びも付かない上位存在。女を前にした人間が抱いたその感情こそが『畏れ』である。

微動だにしない人間たちを前に、女はたおやかに微笑んだ。

そして一台のカメラに目線を合わせる。

一九九九年七月七日、三時十一分。女の言葉が日本を揺るがした。

「初めまして。私が恐怖の大王です」

およそ、十年も昔の話である。

一次創作練習作　？（前書き）

一次創作の世界観、設定を深めるために書いた短編です。サブキャラを軸に置いた短編。続きません。

一次創作練習作　？

ふと、僅かな明かりに瑠璃は目を覚ました。
見れば、カーテンの隙間から明け方の優しい光がもれている。
大きなあくびを一つして、瑠璃は視線を前に戻す。
瑠璃が抱えた腕の中には、暖かな存在がいる。
決して細いわけではなく、しかし太すぎなくもない少年。
瑠璃の腕ではその背中まで腕が回しきれず、脇に手を入れてしがみつく形になっている。
しがみつく。彼我の大きさを鑑みれば、これ以上適切な表現もあるまい。
瑠璃はその胸に頭を預け、小さな体全体を密着させる。
そして再び安寧を貪ろうとした時、少年が身じろぎをする。
少年の腕が掛け布団をめくり、朝の冷たい空気が少年のみを包む。
そして、布団の下にいた瑠璃の姿があらわになり、寝ぼけ気味の目をこすった少年と瑠璃の視線が交差する。

「おはよう、瑠璃」

少年に頭をなでられて、コクリと頷いて返事をする。
少年の挨拶に言葉を返さないのは、別に瑠璃が無口な性格をしているからではない。
単に瑠璃が、言葉を話すという機能を持ち合わせていないからだ。
少年が瑠璃の頭をぽんぽんとたたく。瑠璃はいつものように抱擁を解き、布団から抜け出した。
続いて布団から出てきた少年は窓の正面に立ち、思い切りカーテンを開けた。

この日は一月の二日。
冬の窓は結露に覆いつくされてはいたが、それでも部屋を照らすには充分な光が入ってくる。
少年の身を包むのは、黒を基調とした上下のトレーナー。
それ程背は高い方ではないが、特に低いというわけではない、髪の色も黒で目の色も茶色というどこにでもいるような高校生。
その隣に立って少年の顔を見上げている瑠璃は、見た目は十歳程度の小さな女の子だ。
ただし、その格好は決して一般的とは言えない。
和服だ。
しかも着物と帯の両方の色が黒。
おかっぱに切り揃えられた髪の毛も少年のそれより更に黒く、まさに全身黒尽くめ。
喪服に身を包んでいるようにしか見えない少女だが、瑠璃の事を知っている者からすればむしろ当然の格好だ。
少年も何も気にすることなく瑠璃に両手を差し出す。
瑠璃は少年の腕の間に身を入れてのその肩に手を置き、膝を曲げて跳躍する。
その瞬間、瑠璃の姿が不意に消えた。
代わりに少年の腕の中には、一匹の黒い子猫が抱かれている。

「さ、朝ごはんにしようか」
「みー」

子猫――瑠璃は小さく一鳴きしてから頭を少年の体にこすりつけ、小さく喉をごろごろと鳴らす。
少年は瑠璃を抱いたまま部屋の入口の引き戸を足で開けて、台所へと歩いていく。
少年と瑠璃の二人だけという、一年を通しても滅多に無い一日がこうして始まった。

†

一次創作短編　その一。
お題『とあるモンスター（つまり非人間）から見た人間』

†

台所に来た少年は瑠璃を床におろし、まず神棚に向かった。
瑠璃は隣の居間にある座布団の上に丸まって、少年の行動を観察する。
少年は水、塩、洗米を取り換え、短いロウソクに火を灯して二礼二拍一礼をした。
木で出来た小さな神社を模った物――札宮に入っているのは、今この家を留守にしている少女の髪を、少女自身が名前を書いた和紙に折り込んで作った神札だ。
同居しているのにわざわざ祀る事に意味はあるのか、とその少女

はいつも苦笑していた。
しかし、少年は毎朝必ず丁寧に神棚を祀っている。
この行為は神を祀る以上に、亡くなった祖母の教えに依るところが大きい。
この家には神棚だけでなく仏間もあり、死者の供養はそちらで行なっている。
神棚には今の事を祈り、仏壇には現状の報告と死者の冥福を祈る。
現在と死後、それぞれの司る物が別の方向を向いているのだ。
瑠璃にすらその意味が解るほどに少年は何度も説明していたのだが、それでも少女は苦り顔をするばかりだった。

『ああして祈りを捧げられると、胸が熱くなって困る』

それが、瑠璃だけが聞いていた少女の独り言だ。
すぐ傍で祈りを捧げられると、直接心にその想いが伝わってくるらしい。
顔を真っ赤にしてにやけた顔の少女に、瑠璃が振り回されたり強く抱き締められたりして苦しい思いをした回数は十や二十ではきかない。
ため息を一つ吐いたとき、少年が居間に入ってきた。
テーブルに並べられるのは、白米に味噌汁、漬物にベーコンエッグ。そして鮭の塩焼きだ。
手軽かつオーソドックスなメニューだった。
瑠璃の隣の座布団に座った少年が手を合わせる。
瑠璃が食べる物はない。
というより、食べられる物がない。
瑠璃には体重が無く、そもそも瑠璃を視認したり触れられる人間も少ない。
実の所、瑠璃は子猫の幽霊なのだ。
ただの動物霊の一つであった瑠璃は、偶然神域に迷い込み、そし

て、出会った。
人の姿を模した、人ではないナニカに。
それから瑠璃は変化した。
ただただ磨耗するだけだった脆弱な霊魂から、自然の生気に身を浸して永らえる御魂に。
長い年月を過ごす内に、いつの間にか人の子供の姿を模す事も出来るようにもなった。
人の言葉も、話す事は出来ないが意味を解するようになった。
それでも、瑠璃も人を模したナニカも、ただそこに在るだけの存在でしかなかった。
それを変えたのが、瑠璃の目の前で食事を取っている少年だ。
今現在、部屋はストーブによって暖められてはいるが、瑠璃には気温が低かろうと高かろうと関係ない。
実体を持たない以上、熱移動が起きないのだ。
そんな瑠璃が人里に下りて出会った子供に触れられたとき、瑠璃の中で何かがざわめいた。
それは、初めて感じた柔らかく優しい温かさ。
長い時を経る内に魂に纏わり付いていた澱が、子供になでられるたびに落とされていく感覚に酔いしれる。
そして、瑠璃は少年を神域に導いた。
永きを共にいた存在に、子供を引き合わせるために。

それから十年。子供は少年となり、そしてその周りにいた者たちも大きく変化した。
ただ瑠璃だけが何も変わらず、少年の下で安寧な日々を過ごしている。
気の向くままに振る舞い、ただ変わりゆく様を観察する。
ただ、予感があった。

瑠璃の世界、ちっぽけな子猫の世界に、大きな転機が訪れる予感が。
だが、瑠璃に不安は無い。
これまで同様、瑠璃はただ傍観者であるだけだ。
その変化がいかようなものであろうとも、瑠璃はただ少年の傍に寄り添い続ける。
今も、そしてこれからも。
食事の後片付けを済ませた少年の後に続き、瑠璃は少年の部屋に戻る。
布団の上で丸くなる瑠璃は、机に向かう少年の後ろ姿を眺める。
少年が行なっているのは『勉強』というものだ。
それがどれほどの意味を持つ物なのか瑠璃にはうかがい知れないが、邪魔をすれば怒られる程度には重要であるらしい。
だから、瑠璃は眠る事にした。
『勉強』なるものが一段落すれば、少年はまた瑠璃の相手をしてくれるのだ。
何の邪魔が入る事もなく、少年と共に過ごす一日。
それはまだ、始まったばかりだった。

一次創作練習作　？（前書き）

作者の中でキャラクターを確立するために書いた超短編です。
続きません。が、常にお題は募集しています。よろしければ感想をお願いします。

一次創作練習作　？

一次創作短編　その二。
お題『ミニゲーム』

神木町。
たった十年の間に山奥の村落から世界最高の医療研究都市へと変貌したこの町において、人間の支配域は町の面積のたった一割しかない。その周囲を覆うようにそびえ立つ山々は全て結界によって閉ざされた人外の支配領域だ。
だが、それでもこの狭苦しい町に人は集まる。
吸血鬼による白血病を始めとした血液の病気の治療、鬼に代表される高い知能と異能を持つ人外たちによる自己免疫力、治癒能力の強化などを利用した安全かつ予後の安定した医療、一部の人外の体液から作り出された特殊な効能を持つ新薬、その他人外の協力によって成し遂げられた難病の解決という実績は、数多くの患者や医療関係者の目を惹きつけた。
そんな訳で、町の中央の高台に建つ巨大な屋敷、その麓にある中央病院、そしてそれに併設された私立大学とその他様々な研究施設群の乱立により発展したこの町の人口は約三万人――ただし町外からこの町に通勤、通学する人間はこの二倍に及ぶ――にまで膨れ上がり、当然繁華街や様々な商店、娯楽施設などが展開されてこの町の経済を潤している。
これは、そんな町の中で人間と人外の対立と共存に翻弄される若き少年少女たちの物語――――などでは決してなく、そんな町の一

軒家で行なわれている騒がしい日常の一幕を記録したものである。

とある夏の夜半、窓から入ってくる涼やかな風に、睦月の前に座っている少女が小さく息を吐く。

少女がかき上げた銀の髪から微かに香る甘い匂いに、睦月の心臓が大きく鼓動を打った。

白のTシャツには高校一年生にしては随分と成熟しすぎた二つの膨らみが強く自己主張している。

腰から下は黒い半ズボンがしっかり防御しているものの、上半身は無防備そのものだ。

なぜなら睦月は知っている。そのTシャツの下には、ブラの類いのものが全く装着されていない事を。

この銀髪青眼の少女の名は風音。睦月の故郷の山村で古くから祀られていた“神”であり、睦月にとってかけがえのない女性だ。

睦月と風音の初めての出会いから十年。下着という概念すら知らなかった風音は、ようやく風呂上りにショーツを穿く程度の常識を身につけるに至っている。

逆に言えば、今でも風呂上りではその豊満な胸を丸出しにしたまま家の中を歩き回っているということであり、睦月も特に意識しなければ動揺することはない。

だが、それは意識してしまえば頭からそのことが離れなくなる事を意味している。
そうなれば、睦月は悶々とする思いを抱えこんでしまったり、この二日家にいない一つ年上の従姉弟の伊織が対抗を始めて睦月は更に悩ましい思いをする事になったりする。
そのため、睦月は普段から極力そういった感性を封じ込めてきた。
だが、今の睦月は自ら“女としての風音”を意識して、煩悩で頭を埋め尽くそうとしていた。

「ふむ……。ここまで隙を見せんとは、睦月もやるようになったの」

感心するように風音が凛とした声を発する。
その手には睦月に裏を向けられたトランプが五枚。同じ様に睦月もまた五枚のトランプを手にしていた。
ポーカー。トランプを使ったゲームの一種だ。
ただし、睦月は手札の役作りに対して全く意識することなく、ただただ妄想を膨らませる。

（あの柔らかい胸に指を食い込ませて、芯までしっかり揉みしだいて、先端にむしゃぶりついて……！）

記憶の中から風音のたわわな膨らみの感触を発掘して、頭を煩悩で満たし続ける。
睦月の脳内では、友人一同から固過ぎるとの評価を受けた貞操観念が全武装を展開して罪悪感という名の弾幕を展開しており、僅かに気を緩めるだけで睦月は即刻自決しかねないほどの自己嫌悪に陥るだろう。
だが、たとえどんな手を使ってでも、この勝負に睦月は勝たなければならない。負けたが最後、睦月の貞操は風前のともし火となってしまうのだから。

「これは俺にとっても最後の手段です。これなら風音さんもいつものようにパターンを掴めないでしょう？」
「なるほど。だが、これが最後にして見せよう」

強気な笑顔を浮かべる風音。よほど自信のある手が来たようだ。
が、そんな風音の様子を睦月は一切考慮しない。カードを適当に捨てて運頼みで役を作るか、勝負を下りて次の手番に移るか。直感だけに頼ったこの戦い方で、睦月は風音の頭脳プレーと話術を打破してきた。
現在の戦績は三勝四敗。勝負をパスできるのは三回までだが、両者共に二回パスしてしまっている。
先に五回勝利したものが、事前に決めておいた要求に従うというのがこのポーカーの罰ゲームだ。
ちなみに睦月が勝利した時の要求は、風音に耳掃除をしてもらうことだ。自分でやってもいいのだが、他人に耳掃除をされる時の快感は筆舌につくし難いものがある。
睦月は一瞬だけ自分の手札を見てすぐに目を閉じた。
もちろん手札を一瞬で覚えてしまえたわけではない。
目を閉じた睦月の脳内では腕を組んで爆弾のような胸を強調した風音の艶姿が描かれている。
そんな中、睦月の限りなく削られた理性と手札を不完全ながら把握した無意識が次なる手を繰り出した。
それは――――

「パス、です」

手札をテーブルの上に置く。睦月の手札には三枚のジャックが揃っていた。スリーカードだ。しかし――

「ふ……。見抜かれておったのはワシの方、というわけか」
風音がテーブルに置いた手札はダイヤの3，4，5，6，7。
ストレートフラッシュ。かなり上位の役だ。
思わず安堵の息を吐く睦月に、しかし風音は強気の笑みを崩さない。
しかし不意に風音の顔から笑みが消え、代わりに眉を寄せて睦月を眺めてきた。
「しかし睦月。そこまで必死になるほど、ワシと閨を共にするのは嫌か？」
少々すね気味に問いかけられ、睦月の思考が真っ白になる。
風音が勝った時の要求、それは睦月が風音と閨を共にする事。
閨を共に、同衾、添い寝、そして――その先を考えて必死に顔を横に振った。
同時に顔面が熱くなる。きっと風音には真っ赤に染まった睦月の顔が見えていることだろう。
「いえ、決して嫌じゃないんです。だけど……」
「無論、ただ寝るだけでなく、この身を好きにしてよいのじゃぞ？」
「だ、ダメですそんなの！　そういうのは――！」
言葉に詰まる。
睦月は風音に好意以上の気持ちを持っているし、風音が睦月の事を好いてくれているのも了解している。
だが、それでもダメなのだ。
別に婚前交渉がダメとか、そこまでのレベルの貞操観念を睦月が持っているわけではない。
好き合っているもの同士ならそういう事に及ぶのも（覚悟さえあ

るならば）当然の事だとも考えている。
おまけに人外との婚姻も法律で認められ、人外となら重婚も可能になっている――これは人間との混血を増やそうという上の思惑があったらしい――ので、それぞれの同意さえあれば睦月は風音と伊織の二人と結婚することも出来る。
しかし、睦月には出来ない。
風音たちの好意に応じ、事に及ぶのを自分が許さない。
それは今の自分には禁忌なのだと本能が警鐘を鳴らしている。
だからこそ、睦月は自らに強い制止をかけてきた。
何が問題なのかを探し出し、解消するまでは風音たちと結ばれる事ができないのだと、誰に言われたでもなく睦月は確信していた。

「ふむ。まあ無理強いする積もりは無い。だが、ただ抱き合って寝るというのであれば問題ないのだろう？」
「は、はい……」

頬の熱さを感じながら、睦月は下を向く、
先程までむりやり作り出していた煩悩と、冷や水を浴びせられたように自分を止めた本能と、それでもなお抱いてしまう風音への思慕に睦月の頭はオーバーフローしていた。
不意に伏せられたトランプカード五枚が差し出される。
気がつけば風音は捨て札と山札を混ぜて切り直し、五枚のカードを手にしていた。
ゾクリと背筋に寒気が走る。
嫌な予感から意識をそむけ、手札を見る。
2と5のツーペアと7が一枚。睦月はもうパスは出来ない以上、勝負をかけるほかに無い。
だが、決して悪い手ではないのも事実だ。睦月は風音の方をちら、と見る。
するとちょうど風音と視線が合い、風音の口元がつりあがる。

「ほう、いい手が来たようだな」
「――――！！」
失敗だ。
必死に勝負欲を性欲で消し去っていたというのに、最後の最後になって気が抜けていた。
「だが、必ずわしが勝つ。勝負じゃ」
そして、風音は二枚カードを場に捨て、山札からカードを二枚引く。
睦月も7を捨て、山札から引いたカードは――クラブの5。
フルハウス。充分に勝ちが望める役だ。
だが、嫌な予感はさっぱり消えてくれそうに無い。むしろ強くなっている。
カードから目を上げて風音を見る。その表情は、強い自信に満ちていた。
「さあ、勝負じゃ」
「はい」
同時に手札を晒す。
睦月の役はフルハウス。
そして風音の手札は――四枚の2とジョーカー。ファイブカード。
「……仕込みましたね？」
「さて、なんのことやら」
言葉ではとぼけているが、その顔には得意気な笑みが浮かんでい

る。
　これまではカードを切るのは睦月の役目だったが、今回は睦月が思考停止している間に風音は山札を切り直した。
　そのときに既に仕込んでいたのだろう。
　だが、異議を申し立てる事に意味は無い。敗者は勝者に従うのみだ。

「さて、部屋に行こうか」
「はい……」

　睦月は手を引かれて風音の部屋に入る。
　部屋の隅の机の上にはデスクトップパソコンとモニターが置かれ、壁にはイルカの写真がかけられており、本棚には洋書が並び、部屋の中央にはガラステーブルが鎮座し、部屋の片隅の箱の中には雑多なものがごっちゃに突っ込まれていた。
　ガラステーブルの上には、睦月の両脇に風音と伊織が立ち、睦月の前に瑠璃が立っている写真が置いてあった。
　観念して睦月はベッドに腰をかけると、風音はそっと睦月を押し倒してくる。
　ベッドの奥側に睦月を転がらせた風音は明かりを消し、睦月の隣に潜り込んできた。
　睦月の腹に腕が回され、風音の頭が睦月の胸にこすり付けられる。
　睦月も風音の頭を抱くようにして顔を近づける。銀の髪からの香りに頭がぼうっとなってしまう。
　それから風音の頭を髪を梳く様にして優しくなでてみる。少し抱き付かれる力が強くなった。
　ほう、という恍惚の込められた吐息が聞こえ、風音がその頭を上に向けてくる。
　そして目と目が合い、そしてどちらからともなく笑顔が浮かぶ。

「しかし、睦月も大きくなったな」
「成長期ですから。大体風音さんと同じくらいになれましたね」
風音が枕元のほうに体を上げてくる。そして風音は睦月の腕に頭を乗せて、睦月の体に抱きついてきた。
「うむ。こうして抱き合っておるとぬくぬくじゃの」
「寒いなら窓を閉めるか布団かけるかしましょうか？」
「それでは今度は暑くなる。これくらいがちょうどいい」
ちょっとしたふざけ合いだが、嬉しい気持ちで胸が満たされ、睦月はそっと風音の頭を抱え込む。
密着する体にドキドキするよりも、深い満足感が浮かんできた。
傍に在る。共にいる。それが、何よりの幸福。
山すその少し冷えた空気が気にならない程に抱きしめあい、二人は目を閉じて静かにお互いの体温を確かめ合う。
そして、部屋に安らかな寝息が立ち始めるのはそれから間もなくの事だった。

一次創作練習作　？（前書き）

ひどく難産でした。

酒というお題と高校生をどう組ませてオチを着けるかに悩んだ挙句、こんなオチの小さなお話に。

一次創作練習作　？

一次創作短編　その三。
お題　『酒』

未成年者飲酒禁止法

第1条　満２０年ニ至ラサル者ハ酒類ヲ飲用スルコトヲ得ス
２　未成年者ニ対シテ親権ヲ行フ者若ハ親権者ニ代リテ之ヲ監督スル者未成年者ノ飲酒ヲ知リタルトキハ之ヲ制止スヘシ
３　営業者ニシテ其ノ業態上酒類ヲ販売又ハ供与スル者ハ満２０年ニ至ラサル者ノ飲用ニ供スルコトヲ知リテ酒類ヲ販売又ハ供与スルコトヲ得ス
４　営業者ニシテ其ノ業態上酒類ヲ販売又ハ供与スル者ハ満２０年ニ至ラザル者ノ飲酒ノ防止ニ資スル為年齢ノ確認其ノ他ノ必要ナル措置ヲ講ズルモノトス

第2条　満２０年ニ至ラサル者カ其ノ飲用ニ供スル目的ヲ以テ所有又ハ所持スル酒類及其ノ器具ハ行政ノ処分ヲ以テ之ヲ没収シ又ハ廃棄其ノ他ノ必要ナル処置ヲ為サシムルコトヲ得

第3条　第1条第3項ノ規定ニ違反シタル者ハ５０万円以下ノ罰金

ニ処ス《追加》平１２法１３４２　第１条第２項ノ規定ニ違反シタル者ハ科料ニ処ス

第４条　法人ノ代表者又ハ法人若ハ人ノ代理人、使用人其ノ他ノ従業者ガ其ノ法人又ハ人ノ業務ニ関シ前条第１項ノ違反行為ヲ為シタルトキハ行為者ヲ罰スルノ外其ノ法人又ハ人ニ対シ同項ノ刑ヲ科ス

これが日本における満二十歳未満の飲酒を禁じる法律である。

ならば、人ならざる異族に関してこれらの法律が適用されるのかというと、大抵の場合適用されているのが現状だ。

異族とは人ならざるモノ達の総称であり、その多様性は極まりなく高い。神や鬼の様な遥かに酒に強い種もいれば、獣に近しくアルコールの加水分解酵素を持たない為に極端に酒に弱い種も存在している。

なので、自己申告ではあるが二十歳以上でなければ酒の購入、飲酒は出来ず、外見が子供にしか見えない異族は『ｔａｓｐｏ』の様な身分証明書を携帯している。

ところが、何事にも例外は存在する。

本来法律に記されていない例外など認められるべきではないのだが、未成年でありながら事実上飲酒を黙認されている存在がいるのだ。

それが、私立三鏡高校二年生にしてオカルト研究部の部長、神凪伊織である。

睦月の従姉弟である彼女は、よく風音と晩酌をする。
別にそれだけなら黙っていればばれないのだろうが、生憎彼女が酒を飲むのは周知の事実であった。なぜなら、彼女は酒を飲まねばならない訳がある。

私立三鏡高校。睦月達の通うこの高校における人外の総数は全校で十八人。内訳は、純血二名、混血十二名、幽霊三名、人間一名。
この中で人間でありながら公的に人外認定されている一名こそが、神凪伊織という現人神である。

母親の胎にいた頃から神性を備えていた彼女は、人間でありながら神として祀られている。そのため供物を奉げられているのだが、その中には神酒が当然の様に含まれている。
神は純粋な信仰心から奉げられた供物を無碍にしてはいけない。
勿論神にも好き嫌いはあるし、そういう事はきちんと伝えておけば次からきちんと配慮してもらえる。
さらに言えば悪意から苦手とする物を供物として奉げるなど論外であり、その場合は荒御魂として暴れてもそれは仕方の無い事として受け入れられる。
だが、酒だけは別だ。
神は酒を好む。それは常識で、伊織とて例外ではない。
そして、神酒を奉げられたなら呑まねばならないのが神の世の常である――――と風音は言う。
結果、伊織に礼として酒を渡してくる者が多く、伊織はそれを断る事が出来ないという事態が発生する。
神であるため伊織は格段に酒に強く、未だ睦月は彼女の酔い潰れた姿を見たことが無い。
問題が見受けられない以上町の外の人間が人外に強く出ることは

出来ないし、神木町の上部は酒を飲まずして何が神か、などと断言した過去があるため取り締まる訳が無い。
例え一部の常識や良識が欠落している伊織であっても、酒を飲むのは自分に与えられた物だけであり家の中でしか飲まないなどのルールは一応守っている。
だから、酔った彼女が外に迷惑をかける事は無い。
迷惑を被るのは、睦月ただ一人だけである。

「はい、お代わりです」
「待ってましたー！」

レタスの上に炒めたハラミを載せたつまみを持ってきた睦月を、くせっ毛のやや茶色がかった黒髪を肩まで伸ばした少女が盃を持った手を上げて歓迎する。
風音ほどのメリハリは無いもののバランスの良い肢体を水色のパジャマに包んだその少女こそ、睦月の一つ年上の従姉にして秋神家居候、神凪伊織である。
現在、居間にて伊織は風音と酒盛り中だ。今回二人が飲んでいるのはは風音のバイト先の神社から頂いた神酒である。
ちなみに、件の神社には祭神が滅多に訪れないので、神事の度に風音が代役を務めていたりする。
二人はレタスで肉をつまみ、口に入れる。

「む」
「あ、焼きが足りませんでした？」

つまみを飲み込んだ風音が小さく上げた声に不安になる。ハラミは横隔膜の肉だが分類上はホルモンであるため、やや長めに炒めた

のだが。

「いや、美味い。だがこの味、どこかで……」

「あ。この味付け、下田さんとこの？」

「正解。この間タレを分けてもらったんだけど、やっぱり伊織には判るか」

下田さんとは町で人気の中華料理店の主人の事だ。

ご近所付き合いというか、よく風音に厄払いを依頼してくる恰幅のいいおじさんである。

風音に出来るのはあくまで厄払いで食中毒などを起きにくくする程度なので、人気が出たのは純粋に下田さんの腕が良い為だ。

しかし、酒といえど中国酒は二人の好みに合わないらしく、店の無料券を礼として受け取る場合が多い。

伊織は料理の腕は良いので味付けを憶えていた様だ。

そんな二人は瓶の日本酒を盃でちびちび飲みながら、ちゃぶ台の上のノートパソコンを覗き込んでいる。

ふと、風音が面白い物を見つけたと伊織が説明していた事を思い出す。今は睦月がつまみを持ってきた事で一時中断しているようだ。

つまみを半分ほど平らげた頃、風音がマウスを操作した。少し気になって二人の後ろから画面を覗き見てみる。その瞬間、

――ガチャリ

「ひあっ！？」

無音だったパソコンからドアの蝶番の音が響き、真っ黒だった画面が中央から両脇に開いた向こう側から醜悪かつ悪意に溢れた笑顔の怪物が画面いっぱいに迫ってきた。

思わず上げた悲鳴に振り向いた二人がクスクスと小さく忍び笑いを漏らす。

「睦月、驚きすぎだよ」
「なんとも女みたいな悲鳴じゃな」
「いや、今のは怖いですって」

二人の言葉に顔が熱を持つのを誤魔化そうと言い訳をする。
とはいえ、この神木町でもあのような怪物は出ない。
人と相容れない異族は今や隠世（かくりよ）に住んでいるし、そこまでではないにせよ自然の中で生きることを望む者達は神木町の八割を占める人間の立ち入り禁止区域から出て来ない。
まして、あのような幾種もの蟲の様な生物が皮膚の下を這いずり回るような緑の醜悪な顔は平時に見てもぞっとするに違いない。

「まあ、作り物だしねー」
「人の手で生み出した物の方が実在する怪異より恐ろしいという事じゃな」

二人の意見に素直に納得する。実際に異族達と触れ合った者なら分かるが、彼らの中には人間より理性的で思慮深いモノが多かった。
確かに、彼らよりも『人の悪意』の方がよっぽどおぞましい。
真っ黒な画面に血文字で『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』と表示される。
どうやらホラーゲームの類いだった様だ。
風音がマウスをクリックすると、画面が通常のデスクトップに切り替わる。
そしてフォルダを開かれ、その中の動画ファイルが実行された。
画面に映ったのは桜が幾本も満開に咲き誇る映像。薄く色づいた白い花弁がはらはらと僅かに舞いながら土草に彩りを添えている。
しかしそれは、映像だというのに確かな命の息吹を感じてしまう程の存在感を持った幻想的な光景だった。

「睦月？」

伊織の声で我に返る。風音に注がれた酒を飲み干した彼女は、盃を片手に不思議そうな顔で睦月を見ていた。

画面に映し出される春に魅入られている間に、いつの間にか二人はつまみを全て平らげ酒を酌み交わしていた様だ。

「あ、うん……」

呆けた頭で全く意味を成さない答えを返す。同時に風音がノートパソコンをパタン、と閉じた。

「すまぬな、睦月。流石に神代の光景はぬしには毒なようじゃな」

「ああ、感受性強いもんね。ごめん」

二人が軽く頭を下げる姿に面食らう。特に伊織が本気ですまなそうな顔をしている辺り、今のは余程の物だったらしい。

「えっと、大丈夫ですから気にしないで下さい」

「そうか。じゃが気をつけろよ、睦月。ぬしは視え過ぎてしまうからの」

睦月は一般人には分類されるものの、特殊な素養を持つ。それ故にふとした事がきっかけで異常をきたす事もあるのだ。

だが、それにしても先程の風景は異常すぎた。あれ程までに感化された事など今までに無い。

「さっきのは、何なんですか？」

「あ、アレは昨日あたしが撮った映像だよ」

「え？」

とうに春は過ぎ、桜の木は既に青々と葉を茂らせている。日本全国どこに行こうとも今の季節に桜の花が咲いている地域など無い。
それが在るとすれば――

「異界？」
「うん。月宮の屋敷――隠世の中の景色。ずっと昔にいた春の神様の息吹を残してあるんだって」
「佐保姫か。なるほど、道理で懐かしいと感じたわけじゃ」

月宮の屋敷とは、結界で区切られた人と異族の領域を別つ結界の門となっている異族の長の屋敷である。
この屋敷、建物自体が隠世という異界の一部が顕現した物であり、同時に町を守る結界の要でもあり、普通の人間は中に入るだけで異常をきたすとも言われている。
ふと、伊織が昨日、前にオカルト研究部が起こした問題のツケを払いに行って来ると言っていた事を思い出した。

「いや、こっそり『奥』に入ってみたら綺麗だったんでね。ついビデオを」
「不法侵入！？」
「ううん、ちゃんと許可はもらったよ。……後で」

頭の後ろをかきながら苦笑いする伊織に小さくため息をつく。おそらく彼女は元々面識があったから許されただけで、普通はこの町の最重要拠点に不法侵入など到底許される事では無い。
それを分かっているのかいないのか。あまり後先考えない性格からおそらく分かっていないのだろう。

「まあ、酒の肴になるかなと思って風姉（かざねぇ）と見てたんだけど」

「人の道具を使ったとはいえ、神代の光景を神の手で写し取った物じゃ。神威を秘めるのは当然じゃろう」

まあ、僅かではあるがな、と付け足す風音。

アレで僅かであると言うのなら、入れば人が人でなくなる屋敷と言う噂も信じられる。

「まあ、どうせなら睦月も楽しめる方が良かろう」

そう言って風音は再びノートパソコンを開き、動画を消して別のファイルを開く。

そして画面に映し出されたのは、一枚の企画書。

そこには大きくこう表示されている。

『オカルト研究部・文化祭企画案』

先週の部会で伊織が振った話題だ。風音にメールで送るよう指示されていたので、おそらくはそれを纏めた物だろう。

風音がマウスをクリックすると次の画面に切り替わり、企画案の題名が並べられる。

・悪魔召喚儀式実演――サキュバス編――
・金魚釣り『味付けは塩ダレ』
・今明かされるオカ研の真実
・エリちゃんオンステージ
・恋の魔法大実験
・開け、真理の扉
・オカ研倉庫大公開

まともな企画が何一つ無かった。

一番上は男の性丸出しであり、成功したらしたで危ない。
金魚釣りは訪れた子供の保護者から苦情が殺到しそうだし、オカルト研究部の過去に起こした事件の数々は闇に葬られて置くべきである。
エリちゃんとは三年の先輩で、セイレーンのクォーターだ。彼女が歌った時はランダムで怪異が起きる。何が起きるかは本人にも分からないらしい。
恋の魔法はその部分だけ見ると女子の興味を引きそうではあるが、実験と書かれているのが気にかかる。おそらく一般の生徒を実験対象にする気だろう。
真理の扉は下手したら開けられそうな人物がいるだけに怖い。が、全知なんて物は選ばれた人間にしか受け止めきれない。廃人が量産される事態に発展しかねない。
そしてオカルト部の倉庫は混沌の具現だ。この町自体の歴史は浅いがこの地における異族の歴史は長い。ホンモノがどれほど混じっているか分からない上に風音が遊び半分で作った神器シリーズが盗まれでもしたら大惨事が起きかねない。
おそらく締め切りギリギリに出してくる人が殆どだろうが、とりあえず寄せられた物だけでこれである。不安になるのも当然だ。

「悪魔召喚かー。これやってみない？」
「不可能ではないが、言葉はどうする？　西洋の悪魔に英語で通じるか？」
「やってみなきゃ分からないんじゃない？　とりあえず呼び出して、後はボコればいいじゃない」

なぜか二人は乗り気だった。

「伊織、風音さん、いいの？」
「まあ、オカ研が事件起こすのは毎年の事だし」

「いや、展示系の方が自由時間を確保できるのでは？」
「あ、そうね。じゃあ、倉庫でも公開しとく？」
「酔ってますね、二人共」

忘れていた。この二人は酒に強いが、酔い潰れないだけでしっかり酔うのである。酔って気が大きくなった二人に普段通りの判断が下せる筈が無い。
なんやかんやで既に空き瓶が三本転がっており、今伊織の持っている瓶は残りが三分の一しかない。多分今の二人は面白そうであれば許可を出してしまいそうだ

「いや、これオカ研どころか学校がつぶれかねないですよ？」
「まあ、なんとかなるよ。去年も色んな所に謝って回ったら何とかなったし」
「謝らなきゃいけない事をやらないでよ！」

からからと笑う伊織の頭を軽くはたく。彼女は何か問題が起これば殴って解決すれば良いという考えの持ち主なので、普段から大雑把なのだ。
まして今は酔って危機感が薄れている。素面に戻れば考えを改めるだろうが、問題を起こしたばかりで次の問題を計画していたなどと噂が立ったら大変な事になる事は想像に難くない。

「ふむ。なら睦月の奉納舞ならどうじゃ？」
「僕また女装するんですか！？」

風音までとんでもない事を言い出した。
中学時代に一度巫女姿で舞いをさせられた事があったが、その後に起こった事件は睦月の心に深い傷痕を残している。それ以来睦月は二度と女装はしないと決めていた。

「何よー。じゃあ、睦月は何か考えてるの？」
「普通に食べ物関係とか？」
「却下。それじゃ面白くないじゃない」

伊織に一言で切って捨てられる。とはいえ睦月にもまともな案は浮かばない。
オカ研らしさを出そうとしたら、どうしても厄介な物しか思いつかないのだ。それだけオカルト研究部という部活が異常であるのも事実だが。

「じゃあ、あたしが神降ろしを――」
「神に神降ろしたら喧嘩になるだろ！？」
「やはり、睦月が巫女姿で――」
「それだけは勘弁して下さい！」

酔っ払い二人が自重しない案を出すのを必死で止めながら、騒いでいる内に夜は暮れていく。
この暴走は、いつまで経っても寝に来ない睦月を待ちかねた瑠璃の乱入にて幕を閉じたのであった。

結論――酒を飲んで真面目な話をしてはいけない――
まあ、なんやかんやで睦月も楽しんでいた事だけは否定しないでおく。

一次創作練習作　？（後書き）

無茶振りでない限り、いつでもお題は募集しています。

一次創作練習作　？（前書き）

また難産でした。
いかに寝顔というお題でコメディに走るかに挑戦したところ、こんなコメディでも恋愛でもない微妙な話が出来上がりました。
やはり私にギャグのセンスというか意表を突く才能は無いようです。
なお、お題は常に募集中ですので気軽に投稿してください。

一次創作練習作　？

一次創作短編　その四。
お題　『寝顔』

目の前にあるのは美少女の寝姿。
ピンクのパジャマに身を包んだ少女が掛け布団を蹴って寝相の悪さを披露している。
おそらく十八歳以上である青い髪のボーイッシュな少女の体型は、出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる。しかし、それが普通よりどのくらい大きいのかいまひとつ分からない。
それはおそらく、睦月が現実感を抱いていないのが最大の理由だろう。
パジャマは中央でボタンで留める形になっており、上から二つのボタンが外れていて、さらにはその裾が捲り上がってへそが丸出しになっている。
だが、やけににやついて涎を垂らしている寝顔が色気を台無しにしていた。
いや、性欲を催す対象にはなりにくいが、これはこれで健康的な魅力があると言うべきだろう。

「どうじゃ？」
「可愛いと思いますよ」

パソコンのモニターに表示されたアニメ調の少女のイラストを前にどや顔をする銀髪の少女――風音に、睦月は当たり障りの無い答えを返す。

「むぅ。こう、なんというか、萌え～～、みたいな感じは湧かぬか？」

「そう言われましても……」

確かに風音の描いた少女のイラストは可愛らしいのだが、あくまでそれは二次元の存在だ。リアルな人形よりは可愛らしいとは思うが、萌えという感想を抱くには至らない。

というか、アニメなどは自分とは離れた世界の存在であるから良いのであって、見た目など特に不満点さえなければ良いだけの問題だと睦月は思っている。

なのだが、それでは彼女は満足してくれないのだ。

「これでも無理、か。睦月すら萌えさせられるキャラクターなら、万人受けする事間違いないと思うのじゃが」

「別に僕は、こういう可愛い外見の女の子に実際にいて欲しいわけじゃないですから」

そう、別に外見が良いに越した事はないのだが、人間の魅力は外見だけで決まる物ではない。

そもそも外見は遺伝的なものもあるが、綺麗に、もしくは可愛く魅せたいという女性の努力あってのものだという事を睦月は知っている。

化粧や美容に疎い風音や伊織も髪や身だしなみには気をつけているし、手入れを怠っているわけではないのだ。

何より、睦月の人に対する好悪はその人物の在り方を持って決めている。見た目で好印象を抱いても、それだけで好きになれる筈も

無い。

「大体、こんな素敵な女性(ひと)が目の前にいるのに、絵の女の子の方が可愛いなんて思うわけないでしょう」

「当然じゃ。睦月の一番はワシじゃからの」

胸を張って浴衣の様な寝巻の上からでは分かりにくかったその豊かさを強調しつつ、誇らしげに笑う風音。

少々自信過剰に見えるかもしれないが、これは彼女なりの照れ隠しというか、こちらが本気で言っているのを知っているからこそ喜んでくれている事を睦月も知っている。

ぐい、と風音に腕を引っ張られ、抱き寄せられた腕からやわらかな彼女の胸の感触が伝わってきた。

ゆったりとした浴衣だからこそ外見からはさほど意識しなかったが、こうして押し付けられるとその肉感に感じる物がないでもない。

「どうした？」

「いえ、なんでもないです」

不審に思われないよう組まれた腕から目をモニターに向ける。

画面の女の子は風音の書いている小説のヒロインで、純血の日本人である。

しかし、目鼻立ちは日本人のそれなのだが、およそ日本人らしくない青い髪をしている。色分けはキャラクターの個性を作る重要なファクターであるらしい。

そもそも神木町の性質上赤や金の髪を持つ異族が普通に日常に溶け込んでおり、この町の人間が違和感を抱くわけなど無いのだが、文章化する際には髪の色に言及しないのが暗黙の了解であるという。

確かにこの町に来るまでは、日本人が黒や茶、または白以外の髪をしているのを見た事が無い。

不特定多数に見せる以上、町の中だけで通用するような書き方ではダメなのだろう。

ちなみに、自分の書いた小説に自分で挿絵を添える風音の本業は学生小説家である。

とは言ってもその作品は電子書籍での出版だ。ゆくゆくはきちんとした本という形で作品を世に出すのが目標らしい。

ちなみに神というのは種族であって職業にする気は無いとの事。彼女は人がいいのでつい頼み事を聞いてしまうが、あくまでバイトの範疇に収めているそうだ。

「別に風音さんの好みに描けばいいんじゃないですか？」

「いや、賞を取るには一般に受け入れられないといかん。売れないと判断されれば落とされるからの」

そう言う彼女は時折小説の大賞に応募している。結果は大体二次選考通過止まりといったところだ。

「小説は見た目よりも中身でしょうに。人間として魅力的なら受かりますって」

「とは言ってものう……」

ぴらり、とパソコンの横に置いてあった紙をつまみ上げ、こちらに突き出してくる。

そこに書かれていたのは以前投稿した小説への評価だ。

詳しい評価コメントは別にして、キャラクターやストーリーなど五つの分野に表分けされて良し悪しが表示されている。

その中で一番評価が低いのがキャラクターの項だ。

悪評価の項にチェックが入っているわけではないが、評価されている項のチェックの数は二つ。
逆に展開や表現技術の項は高評価の欄に多くチェックが入っている。
つまり、魅力的な主人公を書くことが出来ていないのが今の風音の欠点である。

「睦月。ぬしはどのような主人公なら良いと思う？」
「む、難しいですね……。とりあえず、芯の通った人ですかね。後は今を大切に出来る人だとなお良しです」

そう答えると、風音はやや難しい顔付きになる。
雰囲気がやや締まった感じがするところから、真面目な話を始めるようだ。

「芯の通った人というのは良いとして、問題は今を大切に出来るという点じゃな。あまり暗い過去を持たせたくはないのじゃが」
「あー……」

風音は永きに渡って人の営みを眺め続けていた。そのせいか、暗い話、救いの無い悲劇を好まない。
彼女が書く作品も基本的にファンタジー、それも異世界といった現実とはかけ離れた世界を舞台にした物が多い。

――大切な物の価値とは失って初めて理解できる。失くした時に心にぽっかりと空いた空隙。その大きさこそ、どれ程大切に想っていたかの証左じゃ。
――だからこそ、簡単に諦めるな。大切さの意味を識った時には、もう手遅れなのじゃから。

風音の持論であり、小さな頃から言い聞かせられてきた言葉がリフレインする。
そして、その意味を睦月は身を持って理解していた。
かつて、風音を失いかけた、あの時に。

「すいません」
「いや、実際その方が受けが良いのは事実じゃしな。これはワシのつまらん拘りに過ぎん」

風音が淡く微笑み、空いた右手で頭を撫でてくる。
その心地良さにされるがままに力を抜くと、途端に体を抱き寄せられた。
体勢を崩した睦月は倒れこみ、体をずらした彼女の太腿の上に頭を乗せる形になる。

「……風音、さん？」

呆然と彼女の名を呼ぶと、彼女は愛しげに微笑みを浮かべた。

「なに、少し昔を思い出してな。ほれ、昔はこうしてやるとすぐに寝入っておったではないか」

確かにそれは事実である。昔はよく風音に膝枕をしてもらっては寝入っていた。
あの頃の睦月は幼く、そうやって姉のような彼女に甘えていたのだ。
その事を思い出し、気恥ずかしくてつい視線を逸らすと、彼女はくつくつと小さく笑い声を漏らす。

「それにな、やはり実物の寝顔を見ておくのが一番参考になるじゃ

ろう」
「は？」
「ほら、あれじゃ」
風音が指差したのはパソコンのモニター。
そこには先程のイラストが表示されたままであった。
「あれ、僕なんですか……」
「正確にはぬしと伊織のイメージを混ぜて書いた物じゃがな。ほれ、あの寝相の悪さは伊織のイメージじゃ」
「いや、伊織はあそこまで寝相は悪くないですよ？」
よく一緒に寝ているために、二人とも伊織の寝相は把握している。
あのようにだらしなく寝る事だけはない。
せいぜい顔をすり寄せてきたり、夢の中の感情が顔に出てくる程度だ。
「とはいえ、学校でのイメージはあんな物じゃろうに」
「まあ、否定はしませんが」
年上であるというのに人前で堂々と睦月に甘えてくる伊織は、確かに少々だらしないイメージをもたれていてもおかしくない。
だが、どちらかというとがさつなガキ大将的なイメージが強いのではなかろうか。
超が付くほどのマイペース。
オカ研絡みで騒ぎを起こすこともしばしば。
挙句の果てに問題に首を突っ込んでは殴って解決するため、風紀委員会ブラックリストの第一位に君臨している。
どちらにしても、清楚や穏やかというイメージからは遠い。
あれでかなり家庭的な面も持ち合わせているのだが。

「ほれ、いいからもう寝てしまえ。もう勉強は済ませたのじゃろう？」
「はい。ですが――」
「ちなみに、断るようなら膝枕から腕枕に変更じゃ。ワシの胸に抱かれて寝る方が気持ち良いじゃろ？」
「このままでお願いします」

選択の余地はなかった。手を出したくとも出せない生殺しコースはごめんである。

「よろしい。安心せい、寝た後は部屋に運んでやるからの」
「はい」

体を完全に横たえ、心なし甘く感じる心地良い香りのする風音の太腿に頭の重みを預ける。
目を閉じると、懐かしい子守唄が聞こえてきた。
睦月の母がよく歌ってくれた唄だ。
母と一緒に寝たのはどれ程昔だったかと振り返るも、はっきりとは思い出せない。
ただ、こうして幼子のように甘えて眠るというのは随分久しぶりだったのは確かだ。
子守唄を聞きながら故郷での思い出に浸っているうちに、意識が朦朧としてくるのを朧気に自覚する。
その感覚に逆らわずにいる内に、いつの間にか睦月の意識は途切れていた。

翌日、確かに睦月は自室の布団に寝かされていた。
ただし、風音に抱き締められて。

なお、後日風音のブログに睦月の寝顔写真が飾られていた事が発覚するのはまた別の話。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9187t/

一次創作練習用短編連作

2011年7月27日22時38分発行